

浸水4819戸、床下浸水1万5443戸。田畑の被害は7万3824ヘクタールに及んだ。

江別市豊幌の農業、山本宏さん(45)は、石狩川支流の幌向川の堤防が決壊し、水が自宅周辺の水田に押し寄せる光景を忘れられない。「水田が海みたいになり、白波が立っていた。生きた心地がしなかった」という。

和人による開拓が始まって130年余り。ほぼ10年に1回の割合で石狩川の流域を洪水が襲ってきた。その中で、この洪水(通称・56水害)は最大規模の水害だった。千歳川放水路計画の発端となり、北海道開発局が治水事業を見直す契機となった。

◆治水効果
昨年9月9日から13日まで、道内は停滞した前線に台風の影響が加わって集中豪雨に見舞われた。石狩川下流域の総雨量は172ミリ。75年8月の洪水発生時に匹敵する雨量だったが、被害は最小限に抑えられた。

「治水対策の効果があった」と、石狩川開発建設部の高橋季承計画課長。堤防のかさ上げ、川のしゅんせつ・掘削に加えて排水機場、石狩放水路の効果があったという。
高橋課長は「しかし、想定規模を上回る洪水が発生する可能性は否定できない」と慎重だ。

◆治水事業の開始
石狩川で1898(明治31)年、大規模な洪水が発生。112人が死亡し18万6000戸の家屋が被害を受けた。本格的な治水事業の着手のきつ

かけになった。

札幌農学校工学科第一期生で、のちに道庁石狩川治水事務所長を務めた岡崎文吉(1872〜1945年)が調査に当たり、10年を超える実地調査や研究の報告書がまとめられた。

これに基づき1910年以降、治水工事がスタートした。岡崎の計画した「岡崎式単床護岸(コンクリートマットレス)」は、下流の一部に今も残る。

濁流に感じる叙情——明治初期の石狩川

明治初期、現在の当別町に入植した岩出山藩の伊達邦直主従をモデルにした本庄陸男(1905〜39年)の小説「石狩川」は、開拓期の石狩川を描く。

新たな開拓地を探して主人公の阿賀妻謙らがトウベツ探検に出かけた折、配下の武士が洪水で濁流にのまれる。本庄は「暗い雨空をうつつした上に、泥土や砂礫(されき)を溶しこみ、くすぶった色でさまざまな流木を内部にかくしていた」と表現した。

初版本のあとがきで本庄は「おこがましくも作者は『石狩川』の興亡史を書きたいと念願した。川鳴りの音と漫々たる洪水の光景は作者の抒情(じょじょう)を掻(か)き立てる」と記している。「川鳴りの音と漫々たる洪水の光景」は、本庄が筆を執った原点であり、石狩川は現在とは比べものにならないほど暴れることが多かったことを想像させる。

私と遺産

石狩史研究はライフワーク

北海道開発局に勤めていた坂田資宏(もとひろ)さん(71)「札幌市南区」が小説「石狩川」に出合ったのは約40年前。農地改良のため長期滞在した当別町内の寄宿先で読み、史実と符合する地名、登場人物などに興味を持った。

坂田さんは休日になると、町内の旧家を訪ねてモデル調べを始めた。「細かなデータは違っているけど、小説は全体として当別の歴史そのもの」と坂田さん。いつしかライフワークになり、開発局を定年退職後は当別町の歴史研究専門員として町史の研究に当たる。

毎週3回、町中心部のビルにある当別歴史研究室に通い、古文書をひもとく。記者が取材に訪れた日、小説の主人公のモデルとなった我妻謙の家に残された文書の整理に追われていた。坂田さんは「当別移住のきっかけとなった戊辰戦争における岩出山藩の戦いを明らかにしていきたい」という。歴史遺産としても、石狩川はとうとうと流れ続ける。